

日本家政学会
被服構成学部会誌

第41号

令和2年3月

目 次

ごあいさつ	1
次期部長あいさつ	2
令和元年度 被服構成学協会 総会	3
令和元年度 被服構成学協会夏期セミナー	
プログラム	4
基調講演 1 「近江商人と呉服太物」	5
基調講演 2 「滋賀の繊維—ものづくりの特性—」	6
講演 1 「浜ちりめん—風合いの技を世界に向けて—」	7
講演 2 「絹弦の製造工程とその音色の魅力」	8
会員報告 「伝統織物の風合い特性・シルエット特性」	9
「滋賀の織物による浴衣としてのテキスタイルデザイン」	9
見学 「近江上布の技法・生地を紹介とブランド展開について」	10
見学 「琴糸づくりの工場内見学」	11
夏期セミナーに参加して	12
平成 30 年度 被服構成学協会公開研究例会報告	13
令和元年度 被服構成学協会公開研究例会	15
若手研究者研究紹介	
「JIS Z 9107」に相当する蓄光布を用いた衣服設計に向けて	
—JIS T 8127 「高視認性安全服」の規格を参考に—	16
第 20 回 全国中学生創造ものづくり教育フェア 報告	18
令和元年度 研究動向(博士・修士論文テーマ, 科学研究費補助金研究課題)	19
会務報告	20
平成 30 年度 被服構成学協会 夏期セミナー収支報告書	22
平成 30 年度 被服構成学協会 収支計算書	23
貸借対照表・監査報告書	24
令和元年度 被服構成学協会 収支予算書	25
三吉満智子先生を偲んで	26
お知らせ	27
ご案内 令和 2 年度 夏期セミナー予告	28
被服構成学協会 規約	29
被服構成学協会 申し合わせ	31
平成 30・令和元年度役員, 令和 2・3 年度役員	32
被服構成学協会入会申込書および変更届, 退会届	33

ごあいさつ

一般社団法人 日本家政学会被服構成学部の
部会長 川端 博子（埼玉大学）

今年度5月に令和の新時代を迎え、希望と平和への願いを新たにしました一年でした。

明るい話題としては、ラグビーワールドカップの開催と大会での日本チームの活躍や旭化成株式会社名誉フェロー吉野彰先生のノーベル化学賞の受賞などがあり、私たちに力を与えてくれました。一方で日本列島には、過去にない規模の台風や洪水が発生し、地球温暖化を実感した年でもありました。また、年度末には新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校も休校になるという非常事態となりました。

私は、2年間、被服構成学部会長を務めて参りました。この間、副部会長はじめとする運営委員の先生方のご尽力と先輩の先生方のアドバイスをいただきながら、部会員みなさまの協力のもと任期を終えられること感謝しております。

今年度の活動を振り返ってみますと、夏期セミナーでは「地域から生まれる技と感性」をテーマに、8月29・30日森下あおい先生を実行委員長とし、滋賀県立大学にて開催し、50名を超える参加がありました。近年、人の手によるものづくりが大きな転換期を迎える中で、地域から発信される、その土地らしいものづくりの「技と感性」に着目し、歴史や環境、人間とつながる魅力を紹介いただきました。1日目には、基調講演として、滋賀大学経済学部 名誉教授 宇佐美英機先生と滋賀県東北部工業技術センター 主任専門員 三宅 肇氏より、過去から現在そして未来を時間軸に講義をいただきました。引き続き、浜縮緬工業協同組合 理事長 吉田和生氏と丸三ハシモト株式会社 取締役社長 橋本英宗氏より、地元滋賀の「技と感性」に関わる内容をお話いただきました。後半の部会員報告では、滋賀大学與倉弘子先生と滋賀県立大学森下あおい先生より「滋賀感性浴衣柄テキスタイルコンペ」で作られた浴衣について、素材の風合い特性とデザイン性の両面から紹介いただき、学生さんたちの浴衣姿が会場に花を咲かせてくれました。

2日目にはバスを貸し切って、「近江上布伝統産業会館」「丸三ハシモト株式会社」を訪問して解説をいただきながら実物を見学しました。初日の懇親会も含め、部会員の交流を深める機会となりました。

1月25・26日に開催された「全国中学生創造ものづくり教育フェア」では、横浜国立大学薩本弥生先生にアイデアバッグ部門の審査委員長をご担当いただきました。今年度より、共催団体への登録が叶って全体会で表彰できましたのは、長年にわたる部会の貢献が認められたことによると考えます。

令和元年度研究例会「JIS衣料サイズ規格の改定と日本人の体型分析」は、2月29日に昭和女子大学で開催される予定で、渡邊敬子先生には企画、石垣理子先生には会場校としてご尽力いただき、部会員の先生には講演を準備いただいております。2014年度に本格スタートした人体計測がJIS衣料サイズ規格設定の基礎データに活用されることを報告するとともに、部会員の研究への活用についてお示しする予定でございました。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催を中止とし、例会後に予定していた臨時総会を急遽メール審議にさせていただきました。

次年度は森下あおい先生を部会長とする新体制のもと、原田妙子先生を実行委員長に名古屋女子大学をお借りして夏期セミナーを開催します。

一刻も早く新型コロナウイルス感染拡大が収束し、活動が再開できることを願っています。

次年度もよろしく申し上げます。

次期部会長あいさつ

一般社団法人 日本家政学会被服構成学部会
次期部会長 森下 あおい（滋賀県立大学）

このたび、令和2年・3年度の部会長に就任することになりました。川端博子部会長の後を引き継ぎ、歴史あるこの部会の次期部会長を務めさせていただくことが決まり、その責任の重さを痛感しています。これからの2年間の部会の運営を、次期副部会長の文化学園大学の渡部句子先生、東京家政大学の田中早苗先生、広島大学の村上かおり先生、運営委員の先生方のご協力を得て、力を尽くして励みたいと思います。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、被服構成学部会は一昨年に部会創立40周年を迎えました。その記念として渡部句子先生を実行委員長として開催された夏期セミナー「ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向」は、部会員はもとより、さまざまな企業や他学会からも大きな関心を得て盛況のうちに終えました。また昨年8月には、大塚美智子先生のご尽力により、科学研究費補助金A「アパレルの質の国際競争力向上の基盤となる日本人計測データの構築と多角的分析」の成果が、「日本人成人の人体寸法データブック 2014～2016」として発刊されました。

多くの先生方の連携によって取り組まれたこれらの成果は、人体計測の技術や解析に関わる研究が、如何に諸先輩方が築いてこられた積み重ねであったかを痛切に感じさせるものであり、同時にこの部会が担う研究分野を、これからも継承していくことの大切さを感じることとなりました。

一方、近年は少子化やグローバル化により日本のアパレル産業の縮小は顕著になり、社会はこれまでと異なる生活と消費の構造を生みつつあります。それは、ものづくりに深く関わる部会の教育、研究環境にさまざまに影響を与えていることを日々感じざるを得ません。こうしたことから社会の変化に柔軟に意識を向け、生じている課題に積極的に取り組むことで、社会に貢献する魅力的な部会であり続けることが必要と考えます。

そこで部会の行事では一層、会員のひとりひとりの研究や日々の教育の内容を意見交換することや、部会活動が現場と相互に循環できるような交流の場をつくりたいと思います。また部会の特徴ある研究成果を教育界や社会へ発信し、心身に寄り添う被服の研究と教育の重要性を、広く知らせる働きかけも必要であると思います。

まず今年の夏期セミナーは、名古屋女子大学の原田妙子先生を実行委員長として、日々の教育や研究を交流できる場を設け、部会の活動を企業、高等学校の先生方や学生の皆さんに知ってもらうような内容で開催する予定です。また若い人がアパレルに興味を持ち、被服分野での活躍を志したいという夢や元気を与える機会につなげていきたいと考えます。日程は東京オリンピックの開催年である諸事情から1日だけの開催としますが、続く研究例会を連続した内容にすることで取り組みを深めていきたいと思います。

最後になりましたが、あらためてこれまでの諸先輩方に敬意を表したいと思います。そして今後とも心の通う部会として、多くの方が参加して下さいますよう、皆様のご支援を賜りますようお願いいたします。

令和元年度 被服構成学部会 総会

日時：2019年5月25日（土）

場所：四国大学

令和元年度被服構成学部会総会は、渡部句子副部会長の司会により下記の通り進行した。

総会次第

- | | |
|----------------------------|--------|
| 1. 開 会 の 辞 | 渡部 句子 |
| 2. 部 会 長 挨 拶 | 川端 博子 |
| 3. 議 長 選 出 | 服部 由美子 |
| 4. 議 事 | |
| (1) 平成30年度事業報告 | 田中 早苗 |
| (2) 平成30年度会計報告 | |
| ① 平成30年度収支決算報告 | 大塚 有里 |
| ② 平成30年度貸借対照表 | 大塚 有里 |
| (3) 平成30年度会計監査報告 | 森 由紀 |
| (4) 令和元年度事業計画（案）について | 田中 早苗 |
| (5) 令和30年度家政学夏期セミナー（案）について | 森下 あおい |
| (6) 令和元年度予算（案）について | 大塚 有里 |
| 5. 議 長 解 任 | |
| 6. 報 告 事 項 | |
| (1) 名誉会員の推薦 | |
| (2) 科研について | |
| (3) その他 | |
| 7. 閉 会 の 辞 | 渡部 句子 |

上記の議事について審議し、承認された。

令和元年度 被服構成学部会夏期セミナー

テーマ：「地域から生まれる技と感性」

日程：2019年8月29日（木）・30日（金）

会場：1日目：滋賀県立大学（彦根市八坂町2500）

2日目：近江上布伝統産業会館（愛荘町愛知川13-7）
丸三ハシモト株式会社（木本町木之本1427）

実行委員長：滋賀県立大学 森下 あおい

プログラム

8月29日（木）	
12:30～	受付（A7棟1階）
13:00～13:10	開会の辞
13:10～14:10	〈基調講演1〉 「近江商人と呉服太物」 滋賀大学経済学部 名誉教授 宇佐美 英機 氏
14:10～15:10	〈基調講演2〉 「滋賀の繊維－ものづくりの特性－」 滋賀県工業技術センター 主任専門員 三宅 肇 氏
15:10～15:30	休憩
15:30～16:10	〈講演1〉 「浜ちりめん－風合いの技を世界に向けて－」 浜縮緬工業協同組合 理事長 吉田 和生 氏
16:10～16:50	〈講演2〉 「絹弦の製造工程とその音色の魅力」 丸三ハシモト株式会社 取締役社長 橋本 英宗 氏
16:50～17:30	〈部会員報告〉 「伝統織物の風合い特性・シルエット特性」 滋賀大学 與倉 弘子 氏 「滋賀の織物による浴衣とテキスタイルデザイン」 滋賀県立大学 森下 あおい 氏
17:30～18:00	移動（送迎バス）
18:00～20:00	〈懇親会〉会場：彦根キャッスルリゾート&スパ（彦根市佐和町1-8）
8月30日（金）見学会（貸切バス）	
9:20～	集合（JR彦根駅東口）
9:30～10:10	移動
10:10～12:00	近江上布伝統産業会館（愛荘町愛知川13-7） 「近江上布の技法・生地の紹介とブランド展開について」 滋賀県麻織物工業協同組合 田中 由美子 氏 西川 幸子 氏
12:00～13:00	移動（車中弁当昼食）
13:00～14:00	丸三ハシモト株式会社（木本町木之本1427） 「琴糸づくりの工場内見学」 丸三ハシモト株式会社 取締役社長 橋本 英宗 氏
	移動
16:00	閉会の辞
16:20	解散（JR米原駅東口）

基調講演 1

近江商人と呉服太物

滋賀大学経済学部 名誉教授 宇佐美 英機 氏

近江商人とは、近江国に本宅を置き、他国稼ぎをした商人のことである。近江国のみで商いをしている人は地商いと呼ばれ、分類されている。類型化できる商人は数種、一国レベルか地域レベルの場合のみであり、〇〇商人と称される。近江国は17世紀に商いの方法を開発し、その方法は、「のこぎり商い」を特徴としており、往路では近江国の特産物を他国へ「持ち下り」、復路では地方の特産物を購入して上方地方に販売するというものであった。基本的には、卸売商であり、日常的に天秤棒を担いで、小売商のところに行っているが、大きな荷物(品物)を担いでいるのではなく、柄見本等の見本帳やローブを持ち歩いている。天秤の先は道中の護身のため鋭利に成形されている。経営が拡大すると、扱う商品が増え、複数の帳簿が必要になるため、複式決算で記す等合理的・近代的な会計制度を普及させた。近江商人の理念は、「三方よし」、「陰徳善事」といった用語で説明されているが、諸々の問題を抱えており、例えば、日本語の用語法としては名詞の後に「に」が必要といったことなどである。

近江商人の輩出地は、地域ごとに輩出時期、進出地域や取扱商品が異なる。例えば、近世初期から商業活動を開始した蒲生郡八幡商人は、江戸開府当初から日本橋通一丁目辺りに出店し、畳表・蚊頂を主力商品とした。地域ごとに違いがあるが、各地への行商を通じて南圏を確立後、その地に出店を開設し、卸売商として薄利多売を旨として多種多様な商品を取り扱ったこと、また、合理的な勘定帳簿を作成したことや不実な商いをするのを戒め、商業を通じて得た利益はその地域に還元することを当然の行為と考え、共存共栄の精神で商業に努め、信仰心が高かったことは共通している。

近江商人が持ち下がった商品は、呉服・太物、荒物、小間物等であるが、それらの詳細については多種・多様であった。日野商人であれば、近世初頭には日野鉄砲を生産する者や日野椀を、中期以降に薬種を扱い、五個荘商人は、編傘を天秤棒に括り付けて行商する創業者の肖像画を伝える商家があるなど個別の商家や時期によって取扱品は異なるが、共通しているのは、近江上布(麻布の上等品)である。これは、室町時代から「高宮細美」と称され高宮の産品として著名であり、近世期においても彦根藩井伊家の定式献上物・贈答品として用いられる等の名品である。太物の一つである木綿に関しては、近江商人が持ち下がった商品としては、古着が重要な意味をもったようである。研究史上では、日野商人の中井源左衛門家の商いが注目されており、近江商人の中で最も成功した商家である。仙台店の取扱品では古着類が最も利益をあげ、中井家は各地の古手問屋から買い入れ、東北地方で販売したが、上方・伊勢地方の古手がとりわけ好まれた。新品の購入はできないが、同じ古手なら上方物が価値を持つというブランド戦略によるものであったと考えられている。

宇佐美氏ご本人は、近江商人の研究をしている立場であることをご講演の最初に話され、この分野の研究は多くはなされていないことを前置きされた。本講演では肖像画が提示されたが、先生のご説明を受ける中でそれらの肖像画に刻まれた近江商人の歴史の一角を感じ取ることができる貴重なご講演であった。



(記録: 末弘 由佳理)

基調講演 2

滋賀の繊維—ものづくりの特性—

滋賀県工業技術センター 主任専門員 三宅 肇 氏



繊維工業全体の現状から滋賀県の位置づけを見ていくと、全国の繊維の事業所及び生産出荷額は、昭和の終わりごろに6万件、12兆円だったものが、現在では生産拠点の海外へのシフトなどの要因で事業所が1/6の1万、出荷額が1/4の4兆円にまで減少している。全24ある事業種のうち繊維事業が占める割合は10%を超える県も多いが、出荷額については多くの県で1～2%と少なく、これらのことから繊維業界は従業員数3人以下などの小規模事業所が多く、売り上げ規模が小さい業種といえる。

その中で、滋賀県は、事業所数は300と多くはないが、大手繊維メーカーの研究所や工場がたくさんあるため、出荷額は愛知、大阪、福井に次いで全国でも4位に位置し県内全事業の3%程度である。

滋賀の地場産業は9つあるが、その中で長浜縮緬、彦根ファンデーション、湖東麻織物、高島綿織物と、4つが繊維に関するものとなっている。長浜縮緬は、高級生地として和装を中心に用いられている。高島産地の綿織物の代表的なものには高島ちぢみがある。ちぢみとはしぼのある織物であるが、同じく強撚糸の縮み戻る力を利用した縮緬との違いは、縮緬が織糸にかけた撚り数の組み合わせにより自然に発生するしぼを制御するのに対し、ちぢみは、しぼの形をした波板を使ってしぼの場所をコントロールしているところにある。ちぢみはそのしぼによって肌への接触面が少なくさらりとした肌触りとなることを生かし、さらに織密度を下げることで通気性を高めてステテコなど夏用の肌着の素材として長く用いられるもので、約250年前江戸時代から高島ちぢみとして生産されてきた。現在高島市内には10社の機屋があり、そこで織られた生機を共同出資の高島さらし共同組合でさらし加工(縮ませる工程)を施し、各社に戻すかたちで生産されている。湖東麻織物(近江産地)としては、近江上布、近江ちぢみ、その他の布があり、近江商人によって全国に広められてきた。

全国を対象とした繊維ブランドの知名度調査の結果では滋賀県は最下位であり、滋賀は織物産地であって消費者に直接そのまま商品として渡る消費財産地ではないために知られていない状況にある。これからの地場産業は伝統だけを守っていてもダメで、今の世の中に合わせた様々な工夫が必要であるとしていくつかの取り組みがなされている。成功事例としては、「BIWACOTTON(ビワコットン)」が挙げられる。これは、江戸時代からステテコ生地として利用されていた高島ちぢみのブランド化で、特性としての軽さやストレッチ性を生かし、現代の技術を組み込んで洋服に合うようにアップデートさせたものである。また、付加価値としてデザインを工夫したものには、滋賀小紋などもある。年に数点織物の企画に取り組み、アンテナショップで展開している。彦根ファンデーションでは縫製技術者の減少により受注量も減っているが、外国人技術者の導入や新しい商品開発への取り組みで対応している。ブラジャーなど複雑な縫製工程をこなせる技術を生かして、ペット用の衣服やロリータファッション用のこだわりのある下着、また、クラウドファンディングで資金を調達しLGBT対応としてトランスジェンダー用の下着の開発を行っている。

企業の限られた予算や期間の中での開発において、今や大学との連携は必須である。今後は、県外大学との研究連携も強化して、伝統にこだわりながらも新しいものに取り組むことの難しさを乗り越え、発展につなげたい。

(記録: 石垣 理子)

講演 1

浜ちりめん一風合いの技を世界に向けて一

浜縮緬工業協同組合 理事長 吉田 和生 氏

吉田氏は、昭和2年に設立した有限会社吉正織物工場の3代目社長であり約40年間、「浜ちりめん」の生産・開発に携わっている。今回のご講演は、「浜ちりめん」の伝統と世界へ向けての新しい取り組みについてである。

元々、湖北地域は美しい水を用いて作られる上質な生糸の生産であった。縮緬が中国の民から大阪の堺へと渡り、京都西陣から丹後、長浜に伝わったといわれている。「浜ちりめん」の生産は中村林助と乾庄九郎によって生産がはじまった。文献は1752年とされているが、様々な経路を調べていくとそれ以前には長浜にちりめんは伝わったと吉田氏はおっしゃっている。その後、彦根藩の厚い保護によって京都市場という重要な販路獲得に成功することができ栄えていった。



「浜ちりめん」の生産方法は、生糸で織って、後で精練をする後練り織物である。その生糸は、現在では日本の機械製糸工場が2社のみとなり、ブラジルのブラタク社と中国の山東省からの輸入に頼っている。2国とも元々は日本からの繭が伝わり生産が始まった。ブラジルのブラタク社については日本製の機会を使用し技術者も日本人が指導を行っている会社であるため、現在は世界一上質な生糸とされている。吉田氏の工場の生産工程は、まず経糸と緯糸の製造工程に分かれ其々が独自の製法によって生産されている。経糸は、糸の取り扱いをよくするために糸を油剤に漬けるなど、糸に滑りやすさ・柔らかさ・静電気を防ぐ性質などを加える「ソーキング」工程を行う。緯糸は、糸を煮る工程「緯煮き」を行う。生糸の表層のセリシンという成分が水を含み柔らかくなるため、生糸自体が柔らかくなり、引きそろえた糸同士が接着することで、より糸に強い撚りをかけることができる。緯煮きは各社独自性を出せる極秘工程となる。その後の「水撚り八丁撚糸」工程では、水撚糸機で下管に巻かれた生糸に水をかけながらさらに撚りを加えて、決められたよりの数(3000回転/m)にする。このような工程を経て、製織に入り最後の製品検査まですべてを一貫生産している。その後、浜縮緬工業協同組合共同加工工場にて「精練」を行う。

「浜ちりめん」の生産のピークは1972年で、116社あり出荷数は約185万反だった。その当時の長浜市の法人税収が「浜ちりめん」関係者が6割を占める程であった。現在は11社で出荷数は約4万反まで減少している。それに加えて、和装需要の減退により生産量が激減するなか、吉田氏は地場産業である「浜ちりめん」の伝統技術を自分なりの織り方で変えたいという一心でこれまでに数々の浜ちりめんの開発に努めてこられた。1998年には伝統技術と最新技術・バイオテクノロジーとの融合によって「- 浜ちりめん - BRIDE SILK」を創り上げる。そして、白生地質感・風合が活かせるウェディングドレスと素材を活かせるパーティードレスへの展開をはじめた。近年では、デザイナーのコシノユマさんと連携してブランド展開を行った。また蛍光シルク「光る浜ちりめん」の開発を行い、現在では桂由美さんがこれを使用したドレスをパリコレクションで発表している。2017年より、世界の高級ブランドとの取り組みを目指し、広幅生地の販売を開発するなど世界に向けて発信されている。江戸時代中期に伝わった縮緬の技術が、こうして現在まで継承され、さらに新しい工夫を加えながら進化している。今回の講演では、吉田氏の「浜ちりめん」への情熱が、未来への原動力につながると痛感した。

(記録: 井口 彰子)

講演 2

絹弦の製造工程とその音色の魅力

丸三ハシモト株式会社 取締役社長 橋本 英宗 氏

古典芸能に欠かせない三味線や琴の楽器糸を製造されている橋本英宗氏のご講演では、演奏者の要望に応える高度な伝統技術をご紹介いただいた。

橋本氏が製造される絹弦は、三味線、箏、琵琶、三線など、和楽器に用いられる弦で、特に繊細な音色にこだわるプロの演奏者に愛用されている。製造される弦は400種類を超える多品種少量生産であり、それぞれの楽器に適した音と演奏者の細かな要望に応えるために、年間に数本だけ出荷する糸も製造を中止せずに作り続けていると話された。この絹弦の製造工程は、およそ12工程で「繰糸」「寸法取り」「合糸」「目方合わせ」「撚糸」「染色」「糊煮込み」「糸張り」「節取り」「糊引き」「切断」「紙付け」など、そのほとんどは手作業であると説明された。繭糸を集束して生糸を作る「繰糸」、一定の長さで結びをつける「寸法取り」、5本の糸を集めて巻き替える「合糸」を経て、「目方合わせ」で1本の糸に撚り合わせる原糸の量が決定される。弦に適した生糸とは、絹のセリシンを程よく残すように精練された太さにばらつきのある生糸であるため、糸の本数ではなく重量を揃えて撚糸される。均一な太さの糸を撚り合わせた弦の音質はシャープであるのに対して、糸の太さが異なる生糸を撚り合わせて作られた弦は、柔らかく余韻のある音質を生み出すと説明された。「撚糸」の工程では、数本の糸に撚りをかけて太さの異なる弦を作られるが、三味線の弦で最も細い「三の糸」は、伝統技法である「独楽撚り」で撚り合わせていると述べられた。現在では丸三ハシモトでしか行われていない「独楽撚り」は、糸の先に付けた独楽の柄を手作業で擦り合わせて撚りをかけるため、音の飛びがよい柔らかく弾力のある糸ができると説明された。三味線の糸は、楽器との色合いを考慮して昔から黄色に染められるため「染色」の工程でウコン粉を用いて染められる。橋本氏は、この弦の染色について、黄色に染められるようになった由来や染料に関する昔の記録なども調査しておられた。撚った糸の接着力を強めるための「糊煮込み」では、地元で収穫された餅米で餅をつき、これを薄く削ったかき餅までも手作りであると説明された。煮溶かして濾した糊餅で撚り合わせた糸を煮込み、糸を引っ張りながら柱にかける「糸張り」で自然乾燥され、「節取り」では、ぴんと張られた糸を目と指の感触を頼りに、糸に残った小さな節を探り当て削り取られる。演奏家が弦に触れた時、指に節が当たり演奏の妨げになることを危惧して行われる工程であると説明された。「糊引き」では、再び糊で表面をコーティングして乾燥させるが、この工程では糊が薄いと剥がれて音に張りがなくなり、厚すぎると糸は丈夫でも音は響かなくなるため、時代や演奏家の好みをとらえて理想の音質になるように手作業で調整すると述べられた。「切断」では完成した糸を定められた寸法に切断し、煤竹製の筒に巻き取って抜き取り、越前和紙で巻きとめる「紙付け」と「糸巻き」を経て絹弦は完成する。丸三ハシモトでは、高品質なより良い弦を目指し、時間と手間を惜しまない製造法を追求し続けた結果、製造工程を削減するのではなく、むしろ付け加えることを繰り返してきたと述べられた。伝統の技を守りながらも時代と演奏家が求める音色のために、現在も進化を続けるものづくりの姿勢が演奏者と観客の感性に響く美しい音色を生み出しているのだと感じた。絹弦にしかない心に響く音色の魅力を知ることによって、日本の伝統技術のすばらしさを再認識できたご講演だった。



(記録：小田 久美子)

会員報告

伝統織物の風合い特性・ シルエット特性

滋賀大学教育学部 奥倉 弘子 氏

この講演は、麻・絹・綿の3素材の男女用各1着ずつの計6着のオリジナルの浴衣を着た学生の皆様の登場でスタートした。これは、地場産地の織物のPRを目的に、滋賀の織物の特徴を活かし滋賀県東北部工業技術センターが企画し滋賀県立大学がデザイン面で協力した「浴衣のテキスタイル制作」による3年間の取り組みの成果である。まずは、この浴衣生地素材特性について奥倉先生よりご説明頂いた。

この浴衣には、滋賀の伝統織物である湖北の絹織物・湖東の麻織物・湖西の綿織物が用いられている。これら滋賀織物の特徴は、緯糸の強い撚りにより表面にできるシボが衣服と肌の間に適度な空間を生じさせるため涼しい触感であること、トタン板のように経糸方向に曲げ剛く緯糸方向に柔らかいため和装のシルエットを出すのに適していること、シボにより緯糸方向にも伸びがあるため着心地も良いことなど、浴衣に非常に適する素材であることなどである。

最後に着用者が客席を周り、それぞれの素材に触らせて頂いた。本作品の中の絹生地は、経糸方向にも撚りがかかることで絹でありながらシャリ感があることなども確認することができた。

滋賀の織物による浴衣と テキスタイルデザイン

滋賀県立大学 森下 あおい 氏

左記の奥倉先生による素材特性のご説明の後に、森下先生より浴衣のデザインについてご説明頂いた。この浴衣の柄は、「滋賀感性浴衣コンペ」にて一般募集した滋賀らしさを表現したオリジナルの浴衣柄である。滋賀県を代表する鳥「カイツブリ」のモチーフ、○△□など抽象的な形を用いて現代的な「和モダン」を表現したデザイン、モノトーンの幾何学的なリボン柄の上に滋賀県のシンボルであるしゃくなげを配置した愛らしい柄の組み合わせなど、応募されたオリジナルモチーフがバランス良く配置された浴衣として完成されていた。また、トートバッグなどによく用いられている帆布による帯も現代的でモダンに仕上がっていた、どれも完成度の高い作品であった。

これらの完成作品は、滋賀銀行、市役所、役場と協働し、行員および職員が浴衣を着用して窓口業務を行うことにより繊維地場産品のPRを行っているとのこと。産学官連携活動の推進が求められている昨今、「地域特性の活かし方」、「取り組む手順」、「完成作品のアウトプット方法」など、非常に参考となるご発表であった。

(記録：角田 千枝)



見学

近江上布の技法・生地を紹介とブランド展開について 近江上布伝統産業会館，滋賀県麻織物工業協同組合

金城学院大学 伊藤 海織

生産工程についての田中氏の解説と、伝統工芸士である立石氏による実演があった。大麻(おおあさ、ヘンプ)は麻科，亜麻(リネン)は亜麻科，苧麻(ラミー)はイラクサ科という全くことなる植物をトータルして「麻」と呼んでいる。大麻が麻薬のイメージになったのは戦後で，戦前までは上質な繊維がとれる植物として生活の中で使われ，また神聖な植物として神社で利用されていた。苧麻はシャリ感が特徴で，夏の衣料に使われている。近江上布の原料は大麻と苧麻で，特に大麻を伝統工芸品にしているのは近江だけである。リネンはヨーロッパから明治以降に入ってきた。非常に柔らかく，オールシーズン着られるので，現在の麻織物産業ではリネンが90%を占めている。

伝統工芸品としての近江上布には緋と生平(きびら)がある。緋は耳じるしで柄を合わせるのが伝統工芸品としての指定で，無地の糸を金枠に巻き，和紙と柿渋と漆で作った型紙に模様を彫った後，金枠の上に乗せて表裏に染料を塗り，解いて機にかけて織ったものである。生平は紡績ではない繊維そのままの糸で平織した布のことで大麻の績みの糸をよこ糸として地機で織った物である。立石氏による3種の実演があった。まず苧麻から繊維を取り出す工程では，刈り取った苧麻から葉を除去し，芯から皮を剥ぎ，一番強くてきれいな韌皮を取り出した。次に大麻の繊維から糸にする工程は「績み，おうみ」と呼ばれ，あく抜きし，ときばしで繊維をこいたものを製品に適した太さに根から裂き，繊維の方向をそろえて継ぐ。方向をそろえないと繊維が逆立ち糸にならない。また繊維そのままを使うとどうしても太さが一定にならないので，継ぐ場所を考えて一定の太さにする。そして地機による製織(写真)である。地機は職人が座る高さが地面に近く，こしにベルトを回してたて糸を固定する。一つだけあるペダルを踏むことによってたて糸を交差させる。1日でできる糸の量は5gであり，着物一反に必要な糸の量は800～1000gである。また1日に地機で織れる布の長さは50～90cmくらいである。また動力を一切使わず全て手作業なので，現在はこの会館でしか織っていない。後継者育成を平成27年から始めており，現在二人育ってきている。作家にならなければ手織りで生活していけず，それまでの10年20年をどう支えていくかが課題である。



つづいて西川氏によるブランド展開についての解説があった。会館は組合でありながら店舗を持っているので，自分たちの売上だけで店舗を運営していかななくてはならない。機織りの手仕事を今後どうしていくかを考えていたところに財団法人伝統的工芸品産業振興協会からのお話がありパリに出店し，半年ごとに商品を変えてリサーチした。緋のよこ糸が入ることによる色柄の優しさ，柔らかさが現地の人に好意的に見られたこと，ショップスタッフが作る工程を理解し客に説明してくれて理解が広がったことが堅調な売上につながったと考えている。その後，海外展開したことで大津プリンスホテルからの依頼があり，サンプル作りの過程で，手織りは小口で織れるという良さがあることを発見した。デザイナーの紹介によりロエベにヘンプを納めることになり，一度つながったことで次の新作を求めてもらえ，取り組み続けている。

見学

琴糸づくりの工場内見学，丸三ハシモト株式会社

京都女子大学 渡邊 敬子

2日目の午後は、琴糸づくりの丸三ハシモト株式会社を見学させていただいた。道中、激しい雨に見舞われるも折よく雨も上がり、蒸気機関車が停車中の木本駅で取締役社長の橋本英宗氏に出迎えていただいた。工場は、駅からすぐの場所で真っ白な屋根が印象的だった。一般的なトタン屋根のような形状だが特殊なセラミック加工がしてあり、熱を通しにくいいため湿度を適切に管理することができる。セリシンをきちんと残すため生のまま生糸を扱い、クオリティの高い絃づくりをされる会社ならではのこことかと拝聴した。

工場に入ると13メートル余りの間隔の2本の柱の間に、光る黄色の絃が何本もぴんと張ってあった。オブジェのように美しい(写真1)。柱の位置は絃の種類によって変えて、等分にすると余りがなくちょうど必要な寸法がとれるようになっているのだそうだ。貴重な材料で手間ひまをかけて作ったものを無駄にしない工夫だ。ここでは糸の乾燥と節などを取り除く作業、そして検品をするという。黒い布を背景に当て目視で確認する。直接、手で触って演奏するため、その妨げにならないよう厳しく検査されている。不良個所として取り除かされたものを触らせていただくと、わずかに手触りが違うことが分かった。長い糸の中から見つけるのは、さぞかし大変だろう。

隣の部屋からは湿度を保つことが必要な場所で、絃を巻き、包装する作業が行われていた。2階では品質を保つためゆっくりと糸とりの機械が動き、職人さんによる糸よりの作業が行われていた(写真2・3)。奥の部屋では、分銅のはかりなど古くからの道具がそのまま使われていた。やはり本来の道具の方が使い勝手が良いのだそうだ。また、木の道具は特注で昔ながらの道具を再現してもらったものだ。その木工の会社も手作りを続けるか悩んでおられたが、同じように伝統産業のための道具の注文が全国から相次いだため今も仕事を続けておられるとのことだ。伝統の技術を守るということを考えさせられるお話だった。

写真4は中国の著名な古琴作者から友情の証としてもらい受けた貴重な品物。信用を得ていることを物語っている。伝統産業の経営には難しい面もあるが、海外に進出し、高い技術を維持されていることを目の当たりにして、伝統産業の今後に大きな希望を感じた。貴重なお時間を割き、親切にご説明いただいた橋本社長に心より感謝を申し上げたい。



写真1 絃が張られた場所での説明



写真2 糸に撚りをかける作業



写真3 餅糊のため保存されているお餅



写真4 丸三の白い絃が張られた古琴

夏期セミナーに参加して

相模女子大学 角田 千枝

令和元年8月29～30日に滋賀県立大学で開催された夏期セミナー「地域から生まれる技と感性」に参加させていただきました。今回のセミナーは、滋賀県が天然繊維である絹、麻、綿の3種類の織物産地が揃う貴重な地域であることを活かした講演会や見学会が催されました。

1日目には、まず「近江商人と呉服太物」のご講演がありました。当時の近江商人については勿論のこと、現在の流通業に如何に繋がっているのかも盛り込まれた奥深い内容でした。2つ目は「滋賀の繊維—ものづくりの特性—」でした。滋賀県の織物の特性を分かりやすくご説明下さりました。特に、実物商品として回覧して下さったトランスジェンダー用下着は、現代社会の抱える問題に取り組みまれており大変興味深く拝聴させて頂きました。「浜ちりめん～風合いの技を世界に向けて～」にて、強撚糸を使用することの意義について、十分に理解できるよう製造方法を詳細に教えて頂きました。「絹絁の製造工程とその音色の魅力」では、糸が衣服以外にも使用されていること、また、高度な技術により国際的に発展されていることをご説明頂きました。最後に、産学官連携活動の成果である浴衣制作については、奥倉先生と森下先生が合同でご発表下さいました。音楽に合わせて、浴衣を着た学生の皆様が会場内をウォーキングして下さるファッションショー形式のご発表により、来場者は間近で作品を見ることができました。また同時に、その素材やデザインについてのご説明を奥倉先生と森下先生がして下さることで理解を深めることもできる演出で大好評でした。

2日目は、2か所の見学をすることができました。「近江上布の技法・生産の紹とブランド展開について」では、植物の麻の状態から麻織物になるまでの実演と、製品化についての取り組みなど非常に明瞭にご説明頂きました。またショップでは、麻布のコーヒーフィルターが大人気でした。「丸ハシモト株式会社」では、前日にご講演下さった絹絁の制作現場を実際に拝見させていただくことができました。工場内に張られた美しい絹絁、撚りをかけるための木製の大型機器など、大変興味深いものばかりでした。また、お土産にご当地名物のサラダパンまでご用意いただき、橋本社長のお心遣いに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

懇親会のホテルもお料理も素晴らしく、様々な先生方とも意見交換をさせていただける貴重な場となりました。また、講演会で学生の皆様が着用していた浴衣のミニチュアが懇親会会場に飾ってありこちらも大好評でした。

伝統的な素材を大切に継承していきながら、新しい発想を加え発展させていらっしゃる取り組みの数々、とても勉強になりました。充実した2日間を過ごさせて頂き、本当にありがとうございました。



平成 30 年度 被服構成学部会 公開研究例会報告

「日本の伝統文化 きものを考える」

名古屋女子大学短期大学部 原田 妙子

被服構成学部会平成 30 年度公開研究例会では、平成 31 年 3 月 11 日(月)に、名古屋女子大学において、「日本の伝統文化 きものを考える」をテーマに、日本の伝統的な和装に関する以下の講演会と有松鳴海絞会館を含めた見学会を開催した。

公開研究例会のため一般からの参加もあり、参加者は、家政学会員 25 名、非学会員 8 名の総計 33 名であった。



講演 1 「手仕事の付加価値が世界を動かす —伝統をデザインするブランディング」

SUZUSAN クリエイティブディレクター 村瀬 弘行 氏

有松鳴海絞という伝統工芸を現代のブランドにするまでの取り組みや考え方、名古屋芸術大学での授業実践や産地のこれからについてお話しいただきました。

名古屋市の市境に400年の歴史を歩んで来た伝統的染色技法の有松鳴海絞がある。和装の文化の中で様々な文様を生み出して来たが、日本の生活文化の変化とともに衰退の一途をたどっていた。その中で海外に活路を見出し23カ国で販売されるに至るまでの10年の軌跡と、伝統をデザインする意味についてお話しいただき、実際に制作された多くの作品を見せていただいた。さらに海外における伝統を伝える教育事情などについて講演いただいた。



事例報告 「きもの文化の伝承と海外発信を目指して」

茨城キリスト教大学 教授 扇澤 美千子 氏

平成 28 ~ 30 年度に科研費基盤研究 C として『「きもの」文化の伝承と海外発信のための教育プログラムの展開』が採択された。その概要として、「伝統文化をふまえた衣生活・復職文化の伝承を目指す教材・試料の充実と発信」「ゆかた着装の体験学習を含めた教育プログラムの実践とその効果検証」「「きもの」文化を海外へ発信するための国際交流活動プログラムの整備」の研究を行うために、新たな教材・資料を発信、教育内容・方法を検討し、きもの文化の理解を深める授業実践により日本文化のよさを自らが発信することを目指し、行われている国内外での実践とその効果について、お話しいただき、さらに、海外における活動などいくつかの事例が報告された。

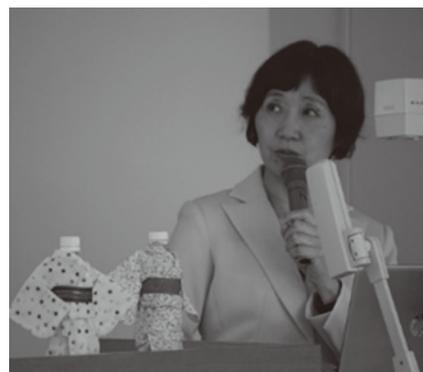


授業実践報告「きもの文化学習を軸とした衣生活領域の学習」

山梨県立大学 非常勤講師 大矢 幸江 氏

ゆかたの着装を含むきもの文化の学習を軸にした授業に、環境配慮型衣生活を学ぶ授業を加えた授業プログラムと、教員研修を合わせた教育プログラムを考案し、授業実践し、授業前後のアンケート調査の分析により、その効果を検証されている。それらの結果についてお話しいただいた。

さらに、授業への取り組みとして、授業プログラム「中高でのゆかた着装と着装後のワークの実践」「ミニチュアゆかた製作」「もったいない精神を学ぶ授業実践」「教員研修」の報告とその効果等が説明された。



有松見学 「有松・鳴海絞会館, SUZUSAN ショールーム他」

講演会場から移動し、有松見学として、有松・鳴海絞会館を訪ねた。会館では、映像による解説と実演、資料室を見学した。映像では、有松絞の成り立ちを学び解説を聞き、実演と絞手との質疑応答、展示作品の見学を行った。

さらに、SUZUSAN オフィス&工房を見学させていただき、鈴三商店の村瀬裕氏(村瀬弘之氏ご尊父)に型彫り・絵刷りの作業を解説していただいた。

また、作品の展示・販売が行われている、SUZUSAN ショールームの見学などを実施し、村瀬氏の解説もいただいた。



今回の研究例会についてのアンケートでは、「消えてしまいそうだった有松絞の文化に、もう一度新しい価値を与えて、海外ブランドともコラボするという事は素晴らしいものと思った。職人の確保と教育も課題だと思うが、どのようにされているのか興味を持った」「村瀬先生の作品が素晴らしく、それを世界に発信されている軌跡とコンセプトを伺えて興味深かった」「ブランディングについて具体例があり、とてもよく分かった」など、非常にいい印象を参加者の皆様が持たれていることが、わかった。

また、事例報告と授業実践報告の2人の先生についても、「精力的な活動に感心した」「HPを活用させていただきたい」「授業の参考にさせていただきたい」「すぐに授業で使わせていただきたい」などの意見をいただいた。

日本の伝統工芸などの技術の継承は、重要なことであると実感し、今後も起伏構成額の分野において取り上げていく課題であると痛感した。今後も、伝統産業との連携や施設見学、産地見学などを開催していただくとともに、中高大の授業実践報告や先生方の研究報告など積極的に取り入れていただきたいと切に希望する。

令和元年度 被服構成学部会 公開研究例会（中止）

「JIS 衣料サイズ規格の改定と日本人の体型分析」

京都女子大学 渡邊 敬子

本年度の例会では、昭和女子大学にて、2019 年度から行われる JIS 衣料サイズ規格の見直しや改定の動向について、JIS 規格改定委員会の委員である大塚美智子先生から講演いただく予定にしていた。さらに、被服構成学部会の部会員を中心に、科学研究費基盤 (A)「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」を受けて 26 年度から 29 年度までに 3000 名に及ぶ人体計測を行っており、このデータが JIS 規格改定の議論の根拠となっています。そこで、3 名の部会員の先生方から、そのデータの分析結果を報告していただく計画であった。

事前に企業・専門学校等の部会員以外の参加者 13 名を含め、41 名の参加申し込みがあったが、コロナウイルスの対策で大規模な集会を避けるようにとの政府の見解を受けて、やむなく中止することにした。予定されていた研究例会の概要は以下の通りであった。

期 日：令和 2 年 2 月 29 日（土）

会 場：昭和女子大学

主 催：(一社) 日本家政学会 被服構成学部会

<講演・研究報告>

講演「JIS 衣料サイズ改訂の動向」

日本女子大学 教授 大塚 美智子 氏

研究報告「2014-2016 日本人の人体計測データにみる成人男女の体形変化

—JIS1992-1994 及び HQL2004-2006 データとの比較—

共立女子大学 教授 丸田 直美 氏

研究報告「2014-2016 日本人の人体計測データの分析結果

—重回帰分析による女性の体型推定—

大妻女子大学 短期大学部 講師 中村 邦子 氏

研究報告「DROP とコマーシャルサイズの日仏比較」

東京家政大学 准教授 田中 早苗 氏

若手研究者紹介

「JIS Z 9107」に相当する蓄光布を用いた衣服設計に向けて —JIS T 8127「高視認性安全服」の規格を参考に—

甲南女子大学 小野寺 美和

1. 概要

本研究の目的は、蓄光糸(光を蓄え自ら長時間発光することが可能な糸)を用いた衣服設計の実現である。東日本大震災以降注目されている蓄光材だが、蓄光機能を施したエコテックス認証の衣服は未だにない。今後普及すれば、暗所でも災害救助の応援や情報収集、避難などの迅速な対応が可能になる。また、人命救助に当たる人達の衣服に取り入れることで、被災者は救助者の存在を視覚的に確認できる。一方、救助者は救助に掛かる時間の短縮が可能になる。同様に、夜間の交通事故の減少にも活用が期待されており、特に社会的弱者の事故を未然に防ぎ、歩行者と運転手双方の不安感を和らげることも期待できる。そこで筆者らは、これまでに蓄光糸を衣服設計に応用するために、蓄光糸を織編した蓄光布がどの程度の耐久性を持ちりん光するか、また蓄光布を知覚するヒトの心理に与える影響についての研究を進めてきた。本稿では、高視認性安全服のJIS規格を参考にした蓄光服の設計への基礎的研究内容を紹介する。

2. 高視認性安全服のJIS規格を参考にした蓄光服の必要性について

現在、蓄光に関する繊維関連のJIS規格は無いため、JIS T 8127「高視認性安全服」の規格を参考にした。「高視認性安全服」とは、図1のような着用者の存在について視覚的に認知度を高めた衣服¹⁾であり、高い視認性のある「蛍光素材」や「再帰性反射素材」が用いられている。様々な作業に従事する人の安全を確保するため、作業環境に応じて着用すべき高視認性安全服が規格化された。現在では、作業従事の有無に関わらず、警察官や配達員など路上で業務に従事する職種において採用されている



図1. JIS T 8127「高視認性安全服」

が、デザイン性、着心地などの問題点から利用拡大には至っていない。元来、再帰性反射素材や蛍光素材は、光を照射した時に反射または励起されて光を帰す素材であり、デザイン性などよりも身体のプロテクションと車両事故リスクを減らすことを重視している。しかし、蓄光素材だけではその性能を発揮する場面が少し異なる。自ら光る蓄光素材は、光のない暗闇でもヒトやモノを照らすことが可能である。現在、市場で販売されている衣服に使用されている蓄光する副資材は多岐にわたる。例えば、昼夜問わず普段着として身に着けることが可能な蓄光刺繍糸やファスナー、更にファッション用の付属テープに加工された多彩なデザインの商品がある。このような多岐にわたる副資材がある一方で、蓄光布を用いた蓄光服の着装研究は未だに見受けられない。故に、筆者らの蓄光布を用いた衣服設計は、災害時に役立ち、事故防止に繋がる製品として、市場に提供できるに違いない。

3. 蓄光布を用いた衣服設計について

東日本大震災で実際に被災した宮城県内の地域住民【18歳～50代までの男女82名(男性4名, 女性78名)】を対象に, 図2に示すサンプル画像を用いて蓄光布をどの部分に配置することが好ましいかを調査した. 調査は上記の地域住民に対して蓄光布の特性を説明した上で, 災害時など電気の供給が停止した暗闇で, もしくは夜道を歩く際などの安全に配慮する衣服として, 衣服のどの部分に蓄光布を取り入れたらよいか, 前, 後ろ, 横の3パターンのサンプル画像に直接自由に記述させ, 人体体表の区分に準じて得られた内容を分類し集計を行った. 結果を図3に示す.

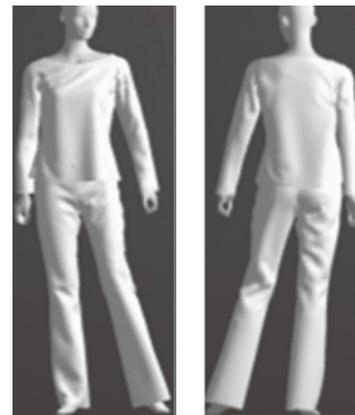


図2. 装着状態をシミュレーションする画像

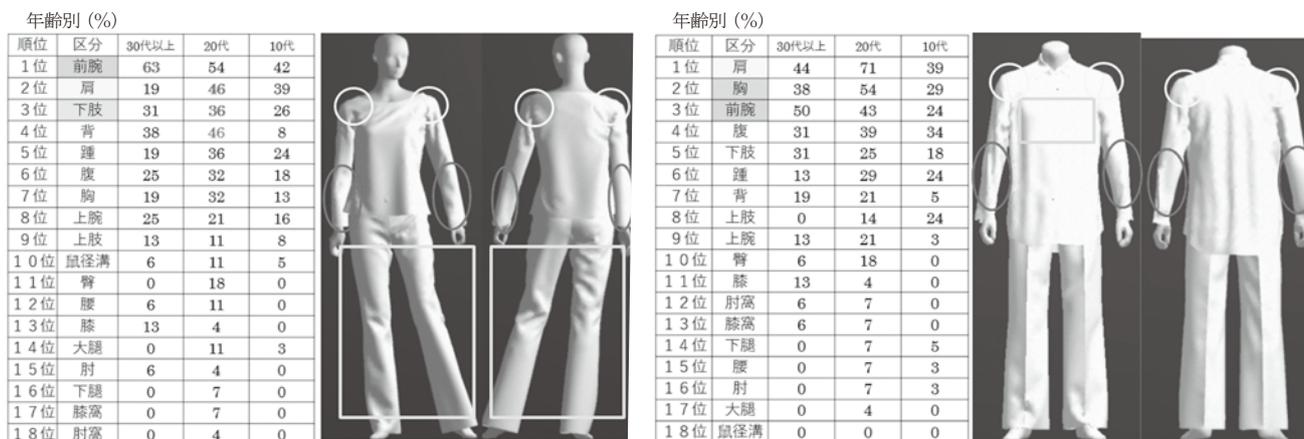


図3. 蓄光布の配置が望ましい人体区分(左:女性, 右:男性)

男女のサンプル画像共に上半身に蓄光素材を配置することが好ましく, 年齢が上がるにつれて肩部よりも前腕部の割合が多い傾向にあった. 下半身は下肢の横側面, パンツの踵部分などの割合が多く見受けられた. 膝や肘など関節部分への配置は少なく特に10代ではほとんど記入がなかった. 10代と30代の比較から10代は特定の部分に配置する傾向があり, 20代と30代になると視認性が高い背中や胸, 肩や, 暗闇でも体の動きが確認可能な前腕や肘や膝など関節部分にまで記入が見受けられた. 蓄光布の役割や安全への配慮など被験者がどのような着用状況を想定したかが結果に影響したものと推察される.

4. 今後の展望

蓄光布が必要とされる人体体表の区分を明確にした上で, 被覆する面積を算出する予定である. また, 蓄光布を立体的にドレープやプリーツなどにする事で, 視認性を高めることが可能かを検討する.

本研究は, 第70回日本家政学会において発表した内容をまとめたものである. 共同研究者の谷明日香氏(四天王寺大学大学短期学部), 武庫川女子大学の竹本由美子氏に深く感謝申し上げます. また研究の一部は平成29-30年度の文部科学省科学研究費補助金若手研究 B(課題番号: 17K12880)および平成29-31年度基盤研究 C(課題番号: 17K00775)の助成によって行った.

参考文献

- 1) 吉井秀雄 著, 一般社団法人日本高視認性安全服研究所 監: 高視認性安全服, 青葉印刷, 2017

第20回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告

横浜国立大学 薩本 弥生

「全国中学生創造ものづくり教育フェア」は、中学生に競技会や作品展で、ものづくり学習の成果を発表し、競い合うことを通じて、ものづくりの楽しさや興味関心を高めることを意図し、ものづくり教育の充実と発展、社会への理解・啓発を図ることを趣旨として開催されている。

今年度は、2020年1月25日、26日に開催された。1日目に足立区立梅島小学校にて「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールが開催され、審査委員長として審査に関わった。2021年度から本格実施される新指導要領の改訂で中学校被服製作の際、「資源や環境に配慮する」ことが明記されたことをうけて今年から「衣服の再利用」を一部に含めることが、製作の条件に加わった。予選で勝ち抜いてきた16人の参加者たちが参加し事前製作レポートに書かれた製作工程に基づき、再利用する衣服とその他の布、型紙、その他の材料を決められた予算の中で用意して3時間半の決められた時間の中で製作した。惜しくも未完成で終了時間となった生徒が2名いた。



コンクールの会場の様子



プレゼンテーションの様子



「豊かな生活を創る」をテーマに自分や家族のニーズを見つけ、それに応じて生活をより豊かにするための思いがこもったもの、さらに、防災やなどの衣生活の社会的ニーズに答えた作品も多くみられた。衣服のリメイクの際、再利用する衣服のデザイン、機能がバッグ創りに活用され、製作技術も高いレベルを保ったものが賞を得ていた。2日目は東京芸術センターで開催され、午前中に審査結果を発表し、審査の講評をした。また、部会長の尽力により今年度から被服構成学部長賞が格上げされ、全体表彰で部会長より賞が授与された。



全体表彰での賞状の授与

体験コーナーの様子

体験コーナーは梅田地域学習センターで実施され、25名が参加した。見本作品に多くの方が興味を示し、中学生、付添の先生や親、兄弟など年代、性別を問わず体験され好評を得た。体験者は、出来上がり作品に大変満足した様子で、家や車の中で使おうという声が聞かれた。昨年の製作物が良かったために、今年もいらして下さった方もいたほどであった。今年は3種類の製作物を用意し、参加者に選んでもらう形にしたため、あまり時間がない方や、裁縫に自信がない方にも縫うことの楽しさについて触れていただくことができた。また、作成こそしなかったが作り方などを聞かれていく方が多く、興味を示して下さる方が増えた印象だった。



体験コーナーの様子

令和元年度 研究動向（博士・修士論文テーマ，科学研究費補助金研究課題）

「令和元年度 博士論文テーマ」

「一般成人女性のためのヘルメット・マスク一体型防災服の開発」

角田 千枝(指導:近藤 恵)お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 生活工学共同専攻

「令和元年度 修士論文テーマ」

「規格外体型の人のための衣服設計ーラグビー選手の体型分析に基づく衣服パターン設計ー」

大本 桃子(指導:大塚 美智子)日本女子大学大学院 家政学研究科 被服学専攻

「乳がん術後女性のための補整下着の販売実態と課題」

張 瀛之(指導:川端 博子)埼玉大学大学院教育学研究科 教科教育専攻

「令和元年度 科学研究費補助金 研究課題」

基盤研究(B)

「アパレルの国際競争力の強化を目指した3Dバーチャル工業用ボディの開発と性能評価」

2016～2019年度, 研究代表者:京都女子大学 渡邊 敬子

「アパレルの国際市場拡大に向けたユニバーサルな個別対応衣服設計システムの構築」

2019～2022年度, 研究代表者:日本女子大学 大塚 美智子

基盤研究(C)

「布を用いた製作学習の学習効果を高める方策と支援」

2017～2019年度, 研究代表者:埼玉大学 川端 博子

「障害者の修正衣服ガイドライン作成に向けた更衣と座位姿勢に適したズボンの製作と評価」

2017～2019年度, 研究代表者:熊本大学 雙田 珠己

「3次元ディスタンスフィールドに基づく未来型アパレル造形システムの開発」

2019～2021年度, 研究代表者:和洋女子大学 山本 高美

「新規の蓄光布を用いて視認性及び持続性に優れ社会的弱者の安全に配慮した蓄光服の創製」

2019～2021年度, 研究代表者:甲南女子大学 小野寺 美和

「アパレルCADシステムを用いた風合い「しっとり」の触覚と視覚評価の関係」

2019～2021年度, 研究代表者:武庫川女子大学 末弘 由佳理

((注)継続研究と部会員の皆様への呼びかけに対してお申し出頂いた分のみを掲載しました。)

会 務 報 告

1. 令和元年度会務報告

1) 事業報告

① 総 会

日時：2019年5月25日（土）

場所：四国大学

② 令和元年度夏期セミナー

「地域から生まれる技と感性」

日時：2019年8月29日（木）・30日（金）

場所：滋賀県立大学

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：2020年1月25日（土）・26日（日）

場所：足立区梅田地域学習センター

④ 研究例会

「JIS 衣料サイズ規格の改定と日本人の体型分析」

日時：2020年2月29日（土）

講演会：昭和女子大学

② 第2回運営委員会・夏期セミナー実行委員会

日時：2019年8月29日（木）

場所：滋賀県立大学

合同委員会

(1) 令和元年度夏期セミナー参加状況

(2) セミナー進行上の確認

(3) 懇親会の確認

(4) 反省会の確認

(5) その他

運営委員会

(1) 令和元年度研究例会について

(2) 部会誌41号編集案について

(3) 令和2年度夏期セミナーについて

(4) 部会規約改正について

(5) その他

③ 第3回運営委員会（中止）

日時：2020年2月29日（土）

場所：昭和女子大学

(1) 当日の研究例会について

(2) 臨時総会議題の確認と進行について

(3) 令和2年度夏期セミナーについて

(4) 令和2年度研究例会について

(5) 中学生創造ものづくり教育フェアへの支援と体制について

(6) 各系の活動報告と引き継ぎ事項

(7) その他

2) 庶務報告

① 第1回運営委員会

日時：2019年5月25日（土）

場所：四国大学

(1) 平成30年度事業報告

(2) 平成30年度会計報告

(3) 平成30年度会計監査報告

(4) 令和元年度事業計画（案）について

(5) 令和元年度夏期セミナー（案）について

(6) 令和元年度予算（案）について

(7) 部会誌第41号編集案について

(8) その他

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 令和2年度事業計画（案）

① 総会

日時：令和2年5月30日(土)

場所：高崎健康福祉大学

② 夏期セミナー

「被服構成学の楽しさ

ーものづくりの実践例ー」

日時：令和2年8月19日または20日

場所：名古屋女子大学

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：令和3年1月下旬

場所：足立区梅田地域学習センター（予定）

④ 研究例会

⑤ 部会誌42号の発行

⑥ ホームページの維持管理

⑦ その他

平成30年度 被服構成学協会 夏期セミナー 収支報告書

◆夏期セミナー

収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	430,000	396,000	部会員 7,000円×42名※2
学会活動助成金※1	100,000	84,082	一般 7,000円×14名
部会会計より補助費	150,000	0	学生 2,000円×2名※3
合計	680,000	480,082	合計58名

※1:実質入金額(徴収税を抜いた額)100,000-15,918=84,082

※2:名譽部会員2名含まない

※3:部会員1名含む

支出の部

費目	予算	決算	備考
1 会場費	10,000	0	
2 講師謝礼	190,000	140,000	講演30,000×3名 20,000×1名 10,000×3名
3 消耗品	60,000	20,814	休憩茶菓子代、講師(懇親会費)、封筒代、インク代
4 通信運搬費	30,000	9,544	各通信費
5 印刷費	10,000	0	
6 要旨集作成費(印刷代)	86,000	44,280	100部
7 旅費交通費(実行委員メンバー)	70,000	0	
8 会議費	120,000	72,280	実行委員会2回分と反省会
9 支払負担金	5,000	432	振込手数料
10 臨時雇賃金	20,000	0	
11 予備費	57,397	0	懇親会費補助
合計	658,397	287,350	

差引残高

480,082-287,350=

192,732

◆懇親会

収入の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	100,000	120,000	部会員3,000円×37名 一般 3,000円×3名
講演会費等消耗品	12,000	6,000	講師2名分
お祝い金		10,000	高部先生より
合計	112,000	136,000	

支出の部

費目	予算	決算	備考・領収書No.
食事・飲み物、他	112,000	132,000	No.12-1
支払負担金	0	432	No.12-2
合計	112,000	132,432	

差引残高

136,000-132,432=

3,568

◆徴収税

内 訳	金額	備考
講師謝礼徴収税	15,918	3,411×3名 2,274×1名 1,137×3名
講師交通費徴収税	0	
合計	15,918	

日本家政学会本部会計に納入いたしました。

※実際は本部から上記金額を引いた金額を受領

◆残金

平成30年度 夏期セミナーの残金 112,218 円を被服構成学協会会計に納入いたしました。

平成31年 2月 4日

会計 井口彰子

大塚有里

武本歩未

平成30年度 被服構成学部会 収支計算書

(2018年4月1日から2019年3月31日まで)

(単位:円)

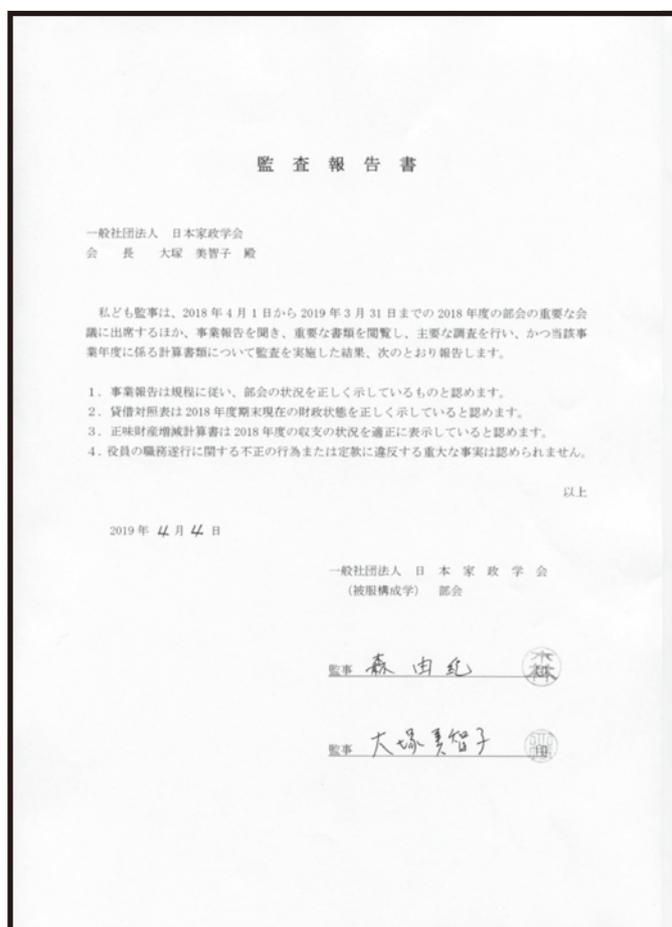
科目	注意	予算	決算	差異	備考
一般正味財産増減の部					
1.経常増減の部					
(1)経常収益					
①基本財産運用益	(本部のみ)				
特定資産運用益	固定資産の大会基金にしている定期預金の利息			0	
入会金				0	
年会費		400,000	350,000	50,000	学生12,500、正337,500
会誌購読料				0	
大会等参加費		520,000	522,000	▲ 2,000	夏396,000、夏懇126,000
広告料				0	
刊行物売上				0	
著者負担金				0	
補助金	(名称と交付者を備考欄に記載願います。)			0	
一般寄付金	活動全般に使用してよい寄付金		10,000	▲ 10,000	高部先生より
特別寄付金	用途を限定した寄付金			0	
雑収入	普通預金利息	8	10	▲ 2	
②本部からの支部費	(支部のみ、選挙の為に通信費も含む)			0	
本部からの支部活動活性化サポート費	(支部のみ)			0	
本部からの活動助成費	活動助成金全額(税金も含む)	170,000	161,920	8,080	夏84,082 研77,838
経常収益計		1,090,008	1,043,930	46,078	
(2)経常費用					
① 事業費		1,053,000	680,482	372,518	
大会会場使用料				0	
大会講師謝金	講師への支払い総額(旅費交通費含む)			0	
大会旅費交通費	実行委員会メンバーなど講師以外への支払い			0	
大会消耗品				0	
大会印刷費				0	
大会研究発表要旨集作成費				0	
大会通信運搬費				0	
大会臨時雇賃金				0	
総会費				0	
セミナー・講演会等会場使用料		50,000	13,000	37,000	研13,000
セミナー・講演会等講師謝金	講師への支払い総額(旅費交通費含む)	250,000	200,000	50,000	夏140,000、研60,000
セミナー・講演会等旅費交通費	実行委員会メンバーなど講師以外への支払い	100,000	7,720	92,280	研7,720
セミナー・講演会等消耗品		180,000	154,110	25,890	夏20814、研1,296
セミナー・講演会等印刷費		30,000	4,838	25,162	研4,838
セミナー・講演会等研究発表要旨集作成費		90,000	44,280	45,720	夏44,280
セミナー・講演会等通信運搬費		20,000	9,544	10,456	夏9,544
セミナー・講演会等臨時雇賃金		20,000	0	20,000	
学会誌等関連印刷費		100,000	87,726	12,274	部会誌
学会誌等関連通信費		5,000	0	5,000	
学会誌等関連原稿料・校閲料等				0	
学会誌等関連電子ジャーナル化費用				0	
研究補助費				0	
表彰費	奨励賞等	25,000	26,480	▲ 1,480	ものづくりフェア
関連学会等会費		10,000	10,000	0	全日本中学校技・家研会費
会議費		50,000	86,138	▲ 36,138	夏72,280、研13,858
広報費		35,000	34,838	162	伊東新料、ドメイン使用料
旅費交通費	大会、セミナー・講演会関連以外の事業に関する旅費交通費	80,000	0	80,000	4月に監査実施のため
事務委託費				0	
支払負担金		3,000	1,808	1,192	振込手数料
雑費	大会、セミナー・講演会関連以外の事業に関する雑費	5,000	0	5,000	
② 管理費		30,000	5,320	24,680	
給料手当	大会、セミナー・講演会関連以外のアルバイト代			0	
福利厚生費	(本部のみ)			0	
旅費交通費	(本部のみ)			0	
通信運搬費	大会、セミナー・講演会関連以外の通信運搬費	20,000	5,140	14,860	払込料負担分
備品費				0	
消耗品費		5,000	180	4,820	スマートレター1枚
光熱水料費				0	
雑費	(本部のみ)			0	
租税公課	(法人税、消費税等本部のみ計上)			0	
地代	(本部のみ)			0	
印刷費	大会、セミナー・講演会関連以外の印刷費	5,000	0	5,000	
修繕費				0	
減価償却費	(本部のみ)			0	
リース料				0	
事務所管理費				0	
退職給与引当金繰入額	(本部のみ)			0	
③支部費					
支部活動活性化サポート費	(本部の支出を計上する欄)				
活動助成費					
経常費用計		1,083,000	685,802	397,198	
当期経常増減額		7,008	358,128	▲ 351,120	
2.経常外増減の部					
(1)経常外収益	(例えば不動産を売る等、通常の活動外での収入、支出なのでほぼ該当なし)				
(2)経常外費用					
当期経常外増減額					
当期一般正味財産増減額		7,008	358,128	▲ 351,120	
一般正味財産期首残高	2017年度末の定期預金、普通預金、現金等の全ての金額	1,349,901	1,349,901	0	
一般正味財産期末残高	2018年度末の定期預金、普通預金、現金等の全ての金額	1,356,909	1,708,029	▲ 351,120	

貸借対照表

(2019年3月31日現在)

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	51,338	0	51,338
普通預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	1,186,624	1,024,694	161,930
通常預金			
振替口座(ゆうちょ銀行〇一九)	470,067	325,207	144,860
流動資産合計	1,708,029	1,349,901	358,128
2. 固定資産			
部会大会基金引当預金			
定期預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)		0	0
通常貯金(ゆうちょ銀行)		0	
固定資産合計	0	0	0
資産合計	1,708,029	1,349,901	358,128
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金			0
負債合計			0
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産			
2. 一般正味財産	1,708,029	1,349,901	358,128
負債及び正味財産合計	1,708,029	1,349,901	358,128



令和元年度 被服構成学部会 収支予算書

(2019年4月1日から2020年3月31日まで)

(単位:円)

科 目	注 意	2019年度	2018年度	備 考
一般正味財産増減の部				
1.経常増減の部				
(1)経常収益				
①基本財産運用益	(本部のみ)			
特定資産運用益	大会基金となっている定期預金の利息			
入会金				
年会費		380,000	400,000	
会誌購読料				
大会等参加費		520,000	520,000	
広告料				
刊行物売上				
著者負担金				
補助金				
一般寄付金	活動全般に使ってよい寄付金			
特別寄付金	用途を限定した寄付金			
雑収入	普通預金利息	10	8	
②本部からの支部費	(支部のみ,選挙の為の通信費も含む)			
本部からの支部活動活性化サポート費	(支部のみ)			
本部からの活動助成費	活動助成金全額(税金も含む)	170,000	170,000	
経常収益計		1,070,010	1,090,008	
(2)経常費用				
① 事業費		973,000	1,053,000	
大会会場使用料				
大会講師謝金	講師への支払い総額(旅費交通費含む)			
大会旅費交通費	実行委員会メンバーなど講師以外への支払い			
大会消耗品				
大会印刷費				
大会研究発表要旨集作成費				
大会通信運搬費				
大会臨時雇賃金				
総会費				
セミナー・講演会等会場使用料		40,000	50,000	
セミナー・講演会等講師謝金	講師への支払い総額(旅費交通費含む)	220,000	250,000	
セミナー・講演会等旅費交通費	実行委員会メンバーなど講師以外への支払い	50,000	100,000	
セミナー・講演会等消耗品		180,000	180,000	
セミナー・講演会等印刷費		15,000	30,000	
セミナー・講演会等研究発表要旨集作成費		60,000	90,000	
セミナー・講演会等通信運搬費		20,000	20,000	
セミナー・講演会等臨時雇賃金		20,000	20,000	
学会誌等関連印刷費		100,000	100,000	
学会誌等関連通信費		5,000	5,000	
学会誌等関連原稿料・校閲料等				
学会誌等関連電子ジャーナル化費用				
研究補助費				
表彰費	奨励費等	30,000	25,000	
関連学会等会費		10,000	10,000	
会議費		100,000	50,000	
広報費		35,000	35,000	
旅費交通費	大会、セミナー・講演会関連以外の事業に関する旅費交通費	80,000	80,000	
事務委託費				
支払負担金		3,000	3,000	
雑費	大会、セミナー・講演会関連以外の事業に関する雑費	5,000	5,000	
② 管理費		20,000	30,000	
給料手当				
福利厚生費				
旅費交通費	(本部のみ)			
通信運搬費	大会、セミナー・講演会関連以外の通信運搬費	10,000	20,000	
備品費				
消耗品費		5,000	5,000	
光熱水料費				
雑費	(本部のみ)			
租税公課	(法人税、消費税等本部のみ計上)			
地代	(本部のみ)			
印刷費	大会、セミナー・講演会関連以外の印刷費	5,000	5,000	
修繕費				
減価償却費	(本部のみ)			
リース料				
事務所管理費				
退職給与引当金繰入額	(本部のみ)			
③支部費				
支部活動活性化サポート費	(本部の支出を計上する欄)			
活動助成費				
経常費用計		993,000	1,083,000	
当期経常増減額		77010	7,008	
2.経常外増減の部				
(1)経常外収益	(例えば不動産を売る等、通常の活動外での収入、支出)			
(2)経常外費用				
当期経常外増減額				
当期一般正味財産増減額		77010	7,008	
一般正味財産期首残高	定期預金、普通預金、現金等の全ての金額	1,708,029	1,349,901	
一般正味財産期末残高		1,785,039	1,356,909	

三吉満智子先生を偲んで

文化学園大学 渡部 旬子



まさに平成から令和に移ろうという2019年4月6日、被服構成学部会名誉会員であり文化学園大学名誉教授の三吉満智子先生がご召天されました。91歳になられたばかりでした。先生は本部会において夏期セミナー実行委員長，副部会長，部会長を長きにわたり務められ，部会の運営と発展にご尽力されました。

広島県福山市のご出身で広島師範学校(現広島大学教育学部数学科)卒業後，文化服装学院師範科を経て文化出版局に就職されテレビ番組「服飾教室」の企画構成を担当，その後文化服飾学院講師から1966年文化女子大学(現文化学園大学)に異動され，1996年からは家政学部長・服装学部長を務められました。2003年に退職された後，これまでの研究成果「服装造形学におけるパターン設計理論とその体系化の研究」をまとめ，2006年信州大学より博士(工学)号を授与され，2008年春「瑞宝小綬章」を受章されました。

いち早く，メジャー採寸に基づくパターンメイキング一辺倒の服作りから「人体・デザイン・素材・パターンの関係を総合的に捉えたシステム化の重要性」に着目し，まだコンピュータがそれほど一般的ではなかった1982年から中小企業事業団『人間工学応用人体計測解析利用システム技術開発 -非接触三次元計測装置の開発-』に参画されました。その後1986年には繊維工業構造改善事業協会『同 -衣服製品の設計法(婦人服)-』において，パターンの構成因子とフィット性，機能性の関係を官能検査と着崩れ量により解析し，主導的にまとめ発表されました。並行して文化女子大学講座として初めて『被服構成学 理論編』を上梓し，研究成果を教育内容に確実に転化し，図学的解釈に基づいて人体とパターンメイキングの関係を理論的に説かれました。1999年には文化式原型の改訂に携わり，ウエストラインを水平に設定して胸ぐせや肩ぐせの量を明確にし，体型特徴をとらえてデザインパターンへの展開が容易になるようになさいました。直接教を受けた多くの卒業生は，今や年齢的に中堅の人材として国内外で活躍しています。

昨今の衣生活や服装文化，そしてアパレル業界の在り方までも大きく変化している中，被服構成学教育の牽引役である三吉満智子先生を失いましたことは，私共にとりまして大きな損失でありとても残念なことです。

多くを温かく時に精力的にご教授戴きましたことに感謝して，心よりご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

お 知 ら せ

1. 部会費について

令和2年度の被服構成学部会費（正会員：4000円、学生会員：2500円、永年会員2000円）は、5月中に下記郵便払込み口座にご送金くださいますようお願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願いいたします。

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1
文化学園大学 井口彰子 宛
TEL・FAX：03-3299-2352
E-mail：a-iguchi@bunka.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは、下記にお願いいたします。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学 短期大学部 中村邦子 宛
TEL・FAX：03-5275-5266
E-mail：nakamuraku@otsuma.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお、退会届につきましては（一社）日本家政学会の退会手続きとは別処理になっておりますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方で、まだご登録いただいていない方は、令和2年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。また、アドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますよう、よろしく願い申し上げます。

ご案内

令和2年度 夏期セミナー 予告

テーマ「被服構成学の楽しさーものづくりの実践例ー」

本年度の夏期セミナーは、東京オリンピックのさなかに開催ということで、1日の開催としました。

既製服が市場にあふれ、情報がインターネットで簡単に取り入れられるようになった現代ですが、『ものづくり』は被服構成学を学ぶものにとっては基本ではないでしょうか。

今回は、被服構成学の『ものづくり』の楽しさをもう一度確認できればと考え、授業で取り入れられている内容や、応用できる事例をご紹介します。一般公開セミナーとしますので、どなたでも参加していただけます。構成学の楽しさを若者に伝えるために、いろいろな実践例などをご覧いただければと考えます。

日程 2020年8月19日(水)または8月20日(木)

場所 名古屋女子大学 本館208 および 被服実習室

夏期セミナー実行委員長

名古屋女子大学短期大学部 原田 妙子

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約

- 第1条（名 称） 本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条（目 的） 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条（事 業） 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条（会 員） 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正 会 員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する原則として一般社団法人日本家政学会会員で、本会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 学生会員 本会の目的に賛同して入会した学生。
 - 3 名誉会員 元部会長、または、特に本会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
 - 4 永年会員 一般社団法人日本家政学会会員の永年会員。
- 第5条（会 費） 会員は年会費を納入する。
- 1 年会費は次のとおりとする。

正会員	4,000 円
学生会員	2,500 円
永年会員	2,000 円
 - 2 名誉会員は会費を納めることを要しない。
- 第6条（入 会） 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第7条（退 会） 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。この場合、既納の会費は返却しない。
- また、継続して2年間会費を滞納した場合は、原則として退会したものとみなす。
- 第8条（役 員） 本会に次の役員をおく。
- | | |
|------|-----|
| 部会長 | 1名 |
| 副部会長 | 若干名 |
| 運営委員 | 若干名 |
| 監 事 | 2名 |
- 第9条（役員の選任） 役員の選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任する。部会長の選任および解任は、理事会の承認を受けるものとする。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。

第 10 条（役員任期） 1 役員任期は 2 年とし、再任を妨げない。

2 役員再任については、申し合わせを別に定める。

第 11 条（役員職務） 役員職務は次のとおりとする。

1 部長は本会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、理事会に報告する。

2 副部長は部長を補佐し、必要な場合には部長の職務を代行する。

3 運営委員会は本会の業務を運営する。

4 監事は本会の会計監査を行う。

第 12 条（役員解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議する。

1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。

2 職務上の義務の違反、その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき。

第 13 条（会計） 本会の会計は次のとおりとする。

1 経費は会費、その他をもってまかなう。

2 会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月末日に終了する。

第 14 条（規約の改廃） 本規約の改廃は総会において承認を受け、理事会に報告する。

以上

附 則

1 施行に関する内規は別に定めることができる。

2 この会則の施行は昭和 54 年 10 月 8 日からとする。

3 この会則の一部改正の施行は昭和 59 年 8 月 3 日からとする。

4 この会則の一部改正の施行は昭和 63 年 8 月 1 日からとする。

5 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成 15 年 8 月 27 日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。

6 この規約の施行は平成 15 年 8 月 27 日からとする。

7 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成 18 年 8 月 22 日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。

8 この会則の施行は平成 18 年 8 月 22 日からとする。

社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき、平成 22 年 5 月 29 日から被服

9 構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。

10 この規約の一部改正の施行は平成 22 年 5 月 29 日からとする。

11 この規約の一部改正の施行は平成 24 年 5 月 12 日からとする。

12 この規約の一部改正の施行は平成 28 年 3 月 14 日からとする。

13 この規約の一部改正の施行は平成 28 年 5 月 28 日からとする。

14 この規約の一部改正の施行は平成 30 年 2 月 27 日からとする。

15 この規約の一部改正の施行は令和 2 年 3 月 6 日からとする。

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務、会計、企画、広報、編集担当をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事は役員会に同席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。
- 6 申し合わせの改廃 運営委員会の議を経て、総会で承認し、理事会に報告する。

附則

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この申し合わせの一部改正施行は、平成18年8月22日からとする。
- 3 この申し合わせの一部改正施行は、平成24年5月12日からとする。

平成 30・令和元年度役員

部会長 川端 博子 埼玉大学
副部会長 渡部 旬子 文化学園大学
短期大学部
森下 あおい 滋賀県立大学

運営委員

(庶務) 田中 早苗 東京家政大学
石垣 理子 昭和女子大学
土肥 麻佐子 文教大学

(会計) 大塚 有里 東京家政大学
井口 彰子 文化学園大学
短期大学部

(企画) 薩本 弥生 横浜国立大学
原田 妙子 名古屋女子大学
短期大学部
渡邊 敬子 京都女子大学

(広報) 伊藤 海織 金城学院大学
工藤 寧子 東北女子大学

(編集) 小田 久美子 名古屋女子大学
短期大学部
角田 千枝 相模女子大学
末弘 由佳理 武庫川女子大学

(監事) 森 由紀 甲南女子大学
大塚 美智子 日本女子大学

事務局 〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学 教育学部生活創造専修 家庭科
TEL : 048-858-9151
E-mail : kawabata@mail.saitama-u.ac.jp

令和 2・3 年度役員

部会長 森下 あおい 滋賀県立大学
副部会長 渡部 旬子 文化学園大学(非)
田中 早苗 東京家政大学
村上 かおり 広島大学

運営委員

(庶務) 中村 邦子 大妻女子大学
短期大学部
石垣 理子 昭和女子大学
土肥 麻佐子 文教大学

(会計) 井口 彰子 文化学園大学
大塚 有里 東京家政大学
水嶋 丸美 名古屋学芸大学

(企画) 薩本 弥生 横浜国立大学
渡邊 敬子 京都女子大学
滝澤 愛 椋山女子大学

(広報) 丸田 直美 共立女子大学
柴田 優子 和洋女子大学
武本 歩未 日本女子大学

(編集) 末弘 由佳理 武庫川女子大学
十一 玲子 神戸女学院大学
小野寺 美和 甲南女子大学

(監事) 大塚 美智子 日本女子大学
川端 博子 埼玉大学

事務局 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
滋賀県立大学 人間文化学部
TEL : 0749-28-8425
E-mail : morishita@shc.usp.ac.jp

(一社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦	年生	性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

編集後記

先生方のご尽力のおかげをもちまして、第41号部会誌をお手元にお届けする運びとなりました。本誌の編集作業を通しまして、夏期セミナーで得た知識等の中身を改めて学ぶことができ、大変勉強になりました。本部会の活動から研究のヒントを頂き、日々の教育・研究活力に繋がっております。この場をお借り致しまして、御礼申し上げます。

末筆ではございますが、本部会誌の原稿ご執筆並びに編集にご協力賜りましたことを心より感謝申し上げます。

(末弘)

昨年度の40周年記念特集に続き、本年度も令和元年という記念すべき部会誌に携わらせていただきました。本年度分も、先生方の素晴らしいご功績、充実した企画の数々など、節目の号に相応しい大変勉強になる内容が盛り込まれた一冊に仕上げることができました。これも、本部会誌のご執筆および編集に快くご協力下さいました先生方のおかげと心より感謝しております。今後とも、お力添えの程何卒宜しくお願い致します。

(角田)

令和2年3月31日発行

発行：(一社)日本家政学会 被服構成学部会

印刷：株式会社アディス

TEL：078-265-6336

